

高校生

星しんぶん、記念すべき第一号のテーマは、ずばり高校生。大人たちは高校生の頃何をしていたの??

LIFESTYLE

とおるちゃんにきいてみよう

「教師なんてやめてやる!」って思ったことありますか? P3



REPORT

強歩遠足

最長70kmを歩く強歩遠足。自分との戦い。一心不乱に完歩を目指します。 P4



BOOK

絶望を生き抜く方法

「残酷で、人のすることじゃない!」と思う凶悪な事件のニュースが流れます。すると、「挨拶をする普通の青年だった……」とてもそんなことをするようには……]なんて、ご近所さんたちがおさまりの台詞を口にします。人は誰もがとことん残酷になれるのです。『夜と霧』が私にそのことを教えてくれました。この本に書かれている、アウシュヴィッツで起こった事実は狂気を超えています。でも、それを起こしたのは私たちと同じ人間なのです。高校生の自意識過剰な私をゴツ

ンと深みに落とし込んだ一冊でした。

ただ、人の残酷さよりもはるかに大切なことを私はこの本から学びました。私たちはよく「なぜ私だけにこんなにひどいことが?!」と人生に問いかけます。不条理な現実はこの世に山ほどあるのに、「自分に限って……」なんて思うのです。強制収容所なんてもってのほかです。

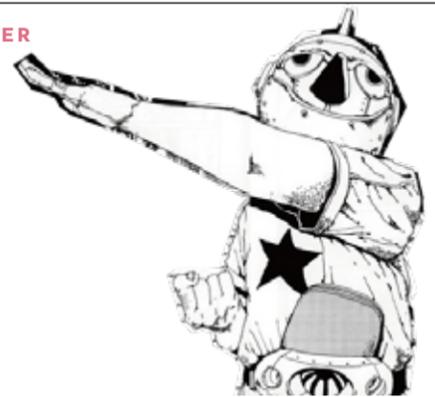
収容所を生き抜いた著者、ヴィクトール・E・フランクルは、絶望的な現実の前に人生に問いかけることはしませんでした。むしろ彼は、人生から問いかけられていることに自らの存在意義をつなぎとめたのです。「さあ、この現実の前に、この世界で君はどう生きるのか?」ってね。2002年に新版が出版されていて、訳

者も表紙も変わっています。新版はまだ読んでいないので、私が読んだ旧版を掲載します。



夜と霧 ドイツ強制収容所の体験記録
V.E.フランクル/霜山徳爾/みすず書房
品切中

LETTER



卓球が好きなたくんへ

自分の感覚にとことん忠実な通称ベコこと星野裕。良いとか悪いとかそういう大人の常識は一切信じない。川には飛び込んでみるし、練乳をチューブから吸ってたりするし、学校にも来ないし、何でも自分の好き放題。不良ってわけじゃなくて、自分の感じることを特別大切にしているかっちょいい男。幼馴染のスマイルこと月本誠は、自分は自分だってクールに振る舞ってるけど、ほんとうは人にどう見られるかに敏感な秀才男子。月と星っていうコンビがたまらんユーモア松本大洋。そして、クライマックスでは、二人のキャラクターがまったく逆になるんです。でも、それが本当っぽいなど。自分の中にもいろんな性格が中に詰

まってるし、一定じゃなくて体調や気分次第だったりしますもん。自分で自分のことを決めつけると不自由で苦しい。自分のことを一番知らないのは自分だったりするかもなあ。ベコもスマイルも卓球を通して、自分と向き合い自分を見つけました。



ピンポン
松本大洋/小学館
¥648 (Kindle版)

BOOK

コンプレックスと友情

顔がすぐに赤くなるマルセラン。そして、クシャミが止まらないルネ。ずっと一緒にいても気にならないくらいの友情で結ばれます。でも、ある日、唐突に途絶えてしまいます。突然のお引越。大人の事情ってやつです。君との出会いに終わりが来るなんて! 今がどれだけ貴重なのかってことは、終わってから初めて気がつくものです。早めに気がつく方法ないなあ。



マルセランとルネ
ジャン・ジャック・サンベ作
谷川俊太郎訳/リブポート
品切中

BOOK

道具のルーツ

道具は人の身体の延長です。自分の身体ではできないことを、道具を使って解決します。例えばハサミ。手では綺麗に切れないから、刃物を合わせて切れるように作りました。便利な道具! このように道具を作って、できないことをとどんでできるようにしてきたのが人類の生活誌。道具を眺めながら、いったい何ができるようになったのかを考えると面白い。この本はイギリスの生活誌が道具

とともに紹介されています。今より不便で時間もかかるんですけど、なんだか憧れちゃうんですよ。



図説 イギリス手づくりの生活誌
伝統ある道具と暮らし
ジョン・セイモア著/小泉和子監訳
生活史研究所翻訳/東洋書林
品切中

LIFESTYLE



愛おしい、魔法の時間

文 石田愛実

中学時代、映画も漫画も本も音楽も、とにかく破壊的なものが好きだった。週に一度レンタルビデオ屋に行って、ホラー映画コーナーの「あ行」から順番に7本借りて、1日1本ずつ鑑賞する。学校から帰ったら親のパソコンを開いて「プログレッシブ ハードコア」「日本 ノイズコア」などのキーワードで好みの音楽をディグる。家族とも友達とも関係は良好で、生活に不満なんてない。でもなんだか憂鬱でつまらない。何が足りないのかわからない。映画を観たり音楽を聴いている時だけ気分が高揚した。高校に上がると、「暇つぶしになるかなあ」なんて軽い気持ちで軽音楽部に入部した。部員は80年代ハードロック・メタルしか聴かない奴もいれば、弾き語りやポップシンガーになりたい女子まで幅広かった。とにかくバンドを組もうと、なんとなく趣味が合いそうな3人が集まり3ピースバンドを組んだ。メンバーは、ベース希望の女の子とドラム希望の男子の。私はギターを希望していたが、余っているボーカルもやることになった。妙に気が合うメンバーとは部活仲間というより親友になった。私はノイズバンドのCDを貸して、メンバーからは70年代サイケのCDを借りる。CDを貸し借りするときのdisk unionの袋が私たちのステータスだった。クラスには友達がほとんどいない。毎日授業が終わるのが待ち遠しい。居場所は部室だけだった。



石田愛実 / Manami Ishida
札幌在住、3KGのデザイナー。ホラー映画とお笑いが好き。週末は映画館とカレー屋に出発しています。元ミュージシャンとの噂。新婚。

STAR

星にまつわるひとを紹介 世界の星びと①

探し物アドバイザー

星の王子さま



「……それでも自分たちが探しているものを見つけれない～略～目にはみえないんだ。心で探さないとなめなのさ。」星の王子さまが仲良くなったキツネから教えてもらった大切なものは、目に見えないという秘密。とりあえず、グーグル先生にリサーチをかけても、なぜか納得いかない場合には、心を使って探してみるといい。すぐに見つかるとは限らないけど、心を使って探し続ければいつか見つかるはずだ。

LIFESTYLE

学校は映画館、先生は支配人

文 佐々木信

高校時代、時間さえあれば映画館に入り浸っていました。当時席数がたった29席しかなくて「日本一小さな映画館」と呼ばれていたシアターキノがお気に入り。現在は移転してすっかり小綺麗な映画館になっています。年配のお客さんが中心になった現在からは想像もつきませんが、1990年代のシアターキノは、薄暗くて、怪しい雰囲気にも包まれていました。不健全な若者たちが集まり、文学、音楽、アート、ファッションの匂いが満ちていました。LGBTは日常。世界にはいろんな人がいるということは映画から学びました。高校生の僕にとってシアターキノは、背伸びして、少し緊張して出かける場所。シアターキノで初めて観た作品はジム・ジャームッシュ監督の「ナイト・オン・ザ・ブルーネット」。世界5都市で同時に起こる出来事をオムニバス形式でまとめた作品。今でも大好きな作品です。18歳の誕生日にこの作品を観たことが僕の



佐々木信 / Shin Sasaki
3KG代表。学生時代は札幌のミニシアターで映写技師として勤務。サッポロスマイルや、AIR DOのマスコットキャラクター、ペア・ドックをデザインしました。

LIFESTYLE

正面から向き合ってくれる友達や先生が居たから

文 國久麻美

「なんで高校に行きなきゃいけないの？ なんてみんな受験勉強をしているの?? そもそも高校は義務教育じゃないから自分の行きたいところに行けるんじゃないの??？」と、中学校3年生の私は疑問だらけでした。勉強を頑張った者だけがいわゆる「いい学校」に通える。選んでいるようで、結局は学校側には選ばれている。偏差値などを基準にして集まった集団がいる学校には何の魅力も感じませんでした。そんな学校ばかりが溢れている。だったら、行かなくていい。「学力だけではなく、人間としての中身を見られる学校はないかなあ」と、ぼんやり考えていた時にテレビで北星余市



を知り、「ここだ！」と思い、2005年に北星余市に入学しました。

地元や親元から離れて寮生活をし、今までと全く違う環境に身を置き、知り合いが一人もいない生活。一切不安はなく、これから自分がどんな高校生活を送るのが楽しみで仕方ありませんでした。正直言って、高校時代の出来事はほとんど覚えていません。でも、心の変化は覚えています。それは、入学前と比べて生きやすく、本来の自分らしくいられるようになったこと。正面から向き合ってくれる友達や先生が居たからです。「麻美は麻美なんだよ。そんな麻美でもいいんだよ」と言われた気がして心が軽くなった感覚がありました。その感覚は今でも残っていて、私にとって何よりも大切なものです。そして、縁があって今私は北星余市の職員室で事務として働いています。東京で新しい会社に勤めたばかりだったのに、「行きたいから行く！」と、気持ちも体も北海道へ。中学校3年生の時と何も変わっていないのです。今でも北星余市は私にとって大切な場所です。でも、そこにすぎるのではなく、ここがあったから頑張ろうといつでも前を向いてこれからも生きていきたいと思います。



國久麻美 / Asami Kunihisa
2007年に本校を卒業し、2015年から職員室事務として勤務。地元は東京だが、たまに帰省する人の多さに疲れる為、すぐに余市に帰りたい。バスケットが好きで、たまに生徒に混じって一躍にやることも。これといった趣味はないが、最近ラーメンと入浴剤にハマりだしている。

人生を決定づけている気がします。打ち込めるものも見つからず、勉強にも身が入らず、帰宅部で時間を持て余し気味だった僕は、少し緊張しながらも、安心してられる映画館という場所を見つけ、映画や音楽や文学や美術にのめり込んでいきました。大学に入学すると同時にシアターキノで受付(無給ですが映画は見放題)として働くようになり、その後映写を担当。大学には最小限だけ出席し、ほぼ毎日劇場に出勤し、暗い部屋で映画を上映していました。僕にとっての学校は映画館で、先生は映画館の支配人でした。支配人夫妻を見ながら、「好きなことを本気でやり続ければ、それが仕事になる」ことを学び、今、グラフィックデザイナーとして働き、この星しんぶんを制作しています。



LIFESTYLE



バナナ

文・写真 辻田美穂子



私は高校2年生からオーストラリアの学校へ行きました。日本の高校へも通いましたが、将来やりたいことに関する授業を選択できるというオーストラリアの教育システムがとても魅力的だったので、単位の認められないお客様扱いの交換留学生としてではなく、現地の生徒と同じように単位を取得してオーストラリアで卒業したいと両親を説得しました。高校2年生の9月、夢が叶って日本の高校を中退し、晴れて正規の留学生として学校生活が始まりました。しかし、期間限定の交換留学生と違って、現地にたくさんいるアジア人留学生の一人になった私は、珍しい存在でもなんでもなく、むしろ、当時根深かったアジア人差別に巻き込まれます。学校に行くところから。今でも北星余市は私にとって大切な場所です。でも、そこにすぎるのではなく、ここがあったから頑張ろうといつでも前を向いてこれからも生きていきたいと思っています。

LIFESTYLE

さて、グラフィックデザイナーの出番はあるのか？

文・写真 佐々木信

みなさん、グラフィックデザイナーという職業をご存知ですか。伝統的には企業のロゴやポスターを、最近ではウェブサイトやインスタグラムも作ったりするのが仕事です。僕が代表を務める3KG(スリーケイジー)は札幌に拠点を置くデザイン会社で家具と雑貨を販売するお店もやっています。今年度から北星余市高校の広報物のデザインを担当しています。北星余市高校の先生たちと打ち合わせを重ねるなかで、このままでは北星余市高校の存続が危ういということを知りました。現在は定員を保っていますが、定員を割ると存続できるか不透明。僕たちはそういう状況でデザインを任せられました。何を期待されているのかは明快です。定員を保ち、学校を存続させること。お洒落なポスターやチラシをつくれれば、北星余市高校校の危機を救えるでしょうか？ 入学希望者が殺到するのでしょうか？ いや、何か違う気がします。北星余市を知れば知るほど、先生たちや、下宿の管理人さんたちの生徒に対する強い想いを、ポスターやチラシに込めるのは難しい……写真家の辻田美穂子さんとチームを組んで、北星余市高校を知ることから始めています。9月中旬には、余市町内にあ

LIFESTYLE

とおるちゃんにきいてみよう



Q 「もうやめた！ 教員なんてやめてやる！」って思うことはありますか？

A 「もうやめた！」とか「やめてやる！」と思ったことはないですね。僕はそういう考え方をしないんです。勢いとか、感情とか、当てつけが含まれてる気がするので嫌ですね。なんだか自分で選択した感じがしない。後々自分に残ってしまう気がします。「やめなきゃいけないのかな」「やめるべきかな」「やめた方がいいのかな」「やめたいな」なら★の数ほどありますよ。いつも薄水の上を歩いてるくらい危うい感覚かもしれません。状況を見ながら自分の意思で選択しています。生きていたら自分の力ではどうしようもないこと、想定していないこと、自分の意図とは違うことがどンドン舞い降りるじゃないですか。そして、直視できないような景色が目の前に広がることもありますよね。でも、結局は自分。僕はその時に自分の意思をどう持って進むかが大事じゃないかと思っています。「苦しい」「嬉しい」「悲しい」「嬉しい」、そうした感情の波にただ乗るようにして生きることはしない。感情は自分の中で起るものですが、外的要因によって揺さぶられます。そうしたいものに身を任せることはしません。それをどう運んでいこうかって考えちゃう。

その時々で自分が思う最善を尽くす。すると導かれて何か生まれる。その中に受け入れざるを得ないものが含まれている時もありますが、それでも、それを受け入れながら最良のものを自ら選んで生きていく。そのこの意味ってなんだろう？ なぜこれが舞い降りてきたのだろう？ 自分はどうしたいのだろう？ そんなことを自分に問いかけてやっています。運命って「命を運ぶ」って書きますけど、たぶんそう言うことだと思っています。

だから、それが最善か、僕にとって意味があるかを考えた時に、自分にとって他に大事な何かが生まれた場合には、「やめてやるー！」ではなく「ごめんなさい、僕はこちらを選びます」といって選択します。やめないことにこだわるわけではありません。「やめる」ことに意味があったり、それが最善だとしたらやめることもある。選択をするってそういうことだと思っていますね。

お便りお待ちしております

星しんぶんへのご意見・ご感想、質問をお聞かせください。
nyushi@hokusei-y-h.edu.jp お便りお待ちしております。



辻田美穂子 / Mihoko Tsujita

大阪出身の写真家。祖母の生まれ故郷である「樺太」のリサーチのため、ちょっと札幌に来てみたら、すっかり居心地よくなってしまい気づくと北海道6年目。やりたいことがたくさんあって、人生足りる心配。



る全ての寮と下宿を訪ねて回り、管理人の皆さんの写真を撮影させていただきました。駆け足だったのでじっくりお話を伺うことはできませんでしたが、資料で見るのと、実際に訪れるのでは大違い。「実際に行ってみないとわからない」というのが1日を終えての感想。「そりゃそうだ」と言われそう

ですが、きっと実際に見学をする生徒や保護者の方々も、同じように感じるはず。だからもし、今迷っているなら、とにかく見学してみたい。そんな風にポンッと背中を押せるようなポスターやチラシをデザインしてみようと考えています。

REPORT



強歩遠足

2018年6月9日に、毎年恒例の強歩遠足が行われました。30km、50km、70kmの中から、自分で選んだ距離をただひたすら歩く北星余市高校の強歩遠足は、不思議な行事。全校で行う行事ですが、歩くのは個人。自分との戦いです。スタート前は「いやだー、めんどくせー」と言いながらも、一旦歩き始めたら、なんだかんだみんな完歩を目指す。道中で、学年が違う話したこともない人と声をかけ合って、そこで一踏ん張りできたり、先にゴールした生徒が、仲間のことを思いながら、まだかまだかと到着を待っている。一方、歩いている生徒は、ゴールを待っている仲間たちのことを思い、重たい一歩を踏み出せる。その一歩がゴールへと繋がっていく…… 1人なのに1人じゃなくて、みんなで作り上げる行事。作り上げるといふか、気がついたら自然にできあがっていたもの。歩くのは1人1人のことなのに、いつの間にか1人1人ではなくなっている。

ただ、歩くだけという行事の中に1人1人の思いやたくさんさんの思いが、色々な場面に詰まっています。どこかで誰かが誰かを思っているし、その誰かもまた誰かを思っている。強歩遠足には、そんな人を思う気持ちが溢れています。ただ歩くだけのようで、歩くだけではない。みんないい顔しています。その場に居ると表情や雰囲気や伝わってくる何かがあるんです。完歩した人も完歩出来なかった人も、本当に本当



に心の底からおつかれさまでした。

70キロスタート組は深夜0時に小樽駅から出発。まず、小樽駅に着いてビックリ！ 生徒の数より保護者の数の方が多いのではないだろうかと思うぐらいの人がいました。わが子がスタートするところを見届けようと来た方。何年も前に我が子が卒業したけれど、同じように頑張っている生徒達を応援しようと駆けつけてくれた元PTAの方々。こうやってみんなに見守られているんですね。

道内・道外から多くのPTAの方がお手伝いに来てくれました。毎回思うのですが本当に北星余市高校のPTAの方々の力って凄い。PTAの方々のご協力なしには学校行事が成り立ちません。前日から来て準備に協力してくれただけでなく、当日は生徒のためにうどん作り。各関門でも飲み物や飴を配ったり、愛のある声かけで生徒たちを励ましてくれました。生徒たちのためだけでなく、一般参加する子ども達のためにと「がんばりましたで賞」というミニ賞状を作ってくれた方もいらっしゃいました。本当に本当にPTAの皆様には頭が下がります。ありがとうございました！

INFORMATION

学校見学を随時受け付けています

受験を考えるにあたって気になるのが実際の学校生活。生徒がどんな学校生活を送っているかを実際にご覧いただけます。北星余市高校では、日曜・祝日を除く9:00～17:00の間であれば、基本的にいつでも学校を見学いただけます（例外もありますので必ず事前にお電話でご確認ください）。

夏休みなどの長期休暇や土曜日に見学いただいてもよいですが、見学するなら平日がお勧め。生徒たちの普段の様子が見えるからです。授業の様子、休み時間の過ごし方、寮や下宿での生活など、ありのままの姿をご覧ください。そして、自分がその場にいることをイメージしてみてください。

ご希望の方は、事前に入試担当までご連絡ください。
0135-23-2165 (職員室直通)
nyushi@hokusei-y-h.ed.jp



ほとんどの方が
下宿も見学しています。

「せっかく北海道まで、せっかく余市まで来たのだから……」と、住む場所となる寮や下宿を訪問される方がほとんどです。学校見学終了後に、下宿見学も希望される場合は、その旨お伝えください。所要時間は、移動も含めて1件につき約30～60分。多い方で3件くらい見学されます（たくさん質問される方、じっくりご覧になりたい方はもう少し時間がかかります）。余市町内の地理感覚や車などの交通手段のない方のために、寮・下宿の管理人さんが学校まで迎えに来てくださる場合もあります。詳しくはお電話でお問い合わせください。

INFORMATION

2018年度も全国で教育講演会・相談会を開催します。

教育講演・相談会では、各会場とも前半約1時間は北星余市高校の説明を中心に、教育についてお話しします。北星余市の教育理念のみならず、子育てについて大切なことは何かを考える機会にしていいただければ幸いです。残りの時間は、他の方に聞かれない形で、本校教員が個別に相談をお受けします。お待ちいただく間は、PTAや、PTAOB、会場によっては卒業生がみなさんとお話いたします。

〈北海道地区〉

- 10月20日 土 札幌市 札幌市教育文化会館
- 10月21日 日 北見市 北見芸術文化ホール(きた・アート21)
- 10月27日 土 帯広市 帯広市民文化ホール
- 10月28日 日 函館市 サン・リフレ函館

〈東北地区〉

- 11月24日 土 福島県 郡山ビューホテル本館

〈関東地区〉

- 10月 6日 土 東京都 JJK会館
- 11月 3日 土 埼玉県 日本環境マネジメント株式会社
- 11月23日 金 茨城県 茨城県県南生涯学習センター
- 12月 1日 土 東京都 JJK会館
- 12月 8日 土 神奈川県 かながわ県民センター
- 2月16日 土 東京都 中野サンプラザ
- 3月10日 日 東京都 中野サンプラザ

〈中部・北陸・関西地区〉

- 10月 7日 日 愛知県 ウィンクあいち
- 10月 8日 月 大阪府 エル・おおさか
- 11月 4日 日 大阪府 アットビジネスセンター PREMIUM大阪駅前
- 12月 2日 日 大阪府 アットビジネスセンター PREMIUM大阪駅前
- 12月 9日 日 岐阜県 岐阜市文化センター
- 2月 9日 土 大阪府 エル・おおさか
- 2月10日 日 愛知県 ウィンクあいち
- 3月 9日 土 大阪府 エル・おおさか

〈中国・四国・九州地区地区〉

- 11月10日 土 福岡県 アクロス福岡
- 11月11日 日 沖縄県 沖縄県立博物館・美術館

編集後記

編集し過ぎることなく、できる限りそのままの北星余市高校を伝えられる方法を考えて辿り着いたのが「新聞」です。中学生、高校生、保護者、先生、卒業生、余市町の方々、誰が読んでも楽しめる新聞を目指しています。次号からはもっと生徒たちも巻き込んで作りたい。(佐々木信)

星しんぶん1号目、なんとか完成に至りました。作っている私たちもまだまだ手探り状態ですが、続けたらいつか北星余市高校の輪郭が見えてくるはず。自分の記事を書くときに自分の高校時代を思い出してみると、あのときやっていたことも、考えていることも、実は今とほとんど変わらないんじゃないかと思えます。多分私は17歳から何も変わってない。きっと他の大人もそう。(石田愛実)